

Zero Sum Short Stories
零和短編集

04

裸囚姫牢虐譚



濠門長恭

目次

一	助命	二
二	竿嚙	一一
三	玉拔	二二
四	宝玉	三〇
五	折檻	四〇
六	肛辱	四七
七	男牢	六一
八	裏切	七七
九	仇討	八一
十	脱出	九三
後書き		九七

一 助命

朝未だき刻^{とき}。突然の物音に志穂姫は眠りを破られた。瞬時に異変を察して、飛び起きる。

雨戸が打ち壊される音。廊下を走り回る足音。

(押し込みか、夜討ちか?)

出陣で手薄になつているとはいえ、下働きを含めれば二十人余が寝起きする領主の館である。夜盗ではなからう。しかし、野上一族の侵攻に直面している今、近郷で争う愚を犯す者がいるとも考えがたい。

「姫様っ！」

襖を蹴倒さんばかりの勢いで、小林勇壮が駆け込んできた。

「持ち堪えられませぬ。お逃げください。お支度を」

逃げる。どこへ?

考えるより先に身体が動いていた。男の目を気にしているときではなからう。夜具の搔巻を脱ぎ捨てて、衣紋掛けの小袖に手を伸ばした。が、袖を通すひまもなく、乱暴な足音が近づく。志穂姫は襦袢姿のまま、枕元の小太刀を取って一尺五寸を抜き放った。

勇壮が廊下に飛び出す。たちまち、激しい剣戟の音。

素肌に胴丸を着けた髭面の男が押し入ってきた。

「おお、いたいた」

右手に太刀を握ったまま、左手を伸ばして志穂姫を捕まえようとする。

「慮外者ッ！」

小太刀が一閃して。

ザンツ……男の左手首が切り飛ばされる。

が……志穂姫の果断は、そこまでだった。生まれて初めて人を斬った感触が、ざらついた震えとして手に伝わる。内庭から差す月明かりの中で、男の腕から吹き出す血が赤い。

一瞬の呆然。手首を切り飛ばされた男が太刀を捨てて志穂姫にむしゃぶりつき、組み伏せる。

「こんちくしょう。この女アヤあ！」

がしん、がしん……と、頬桁を殴りつける。

小太刀の修業を重ね、いざという秋ときは一族と運命を共にする覚悟も備えてはいても、しかし、か弱き乙女である。男の剥き出しの暴力に怯えて、なす術すべを知らない。

廊下での戦いを制した男どもが闖入しなければ、志穂姫は殴り殺されていたかもしれない。

「やめろ。無傷で連れて来いというのが、殿様のお指図じゃねえか」

志穂姫は助け出され——なかった。うつ伏せに押し倒されたまま背中に両手をねじ上げられて、縄で縛られた。引き起こされて。

「へへえ……もう、いっちよ前に女じゃねえか」

襦袢の前をはだけられた。志穂姫を縛った男が、役得とばかりに八分咲きの乳房をこねくる。

「やめよ。狼藉は許しませぬ」

おぞましさと痛みとに惑乱しながらも、毅然と叱りつける志穂姫。もちろん、男どもは聞く耳を持たない。

辱めを受けるくらいなら——と、自害を決意したのだが。口唇から突き出した舌を噛み切ることはできなかった。

「おおっと。死なれちゃ困るんだよ」

顎をつかまれて。帯が引き千切られ丸められて、半開きの口に押し込まれた。

「ぶむう……うう！」

手首が吊り上げられて、縄尻が頬をくびつた。

「女房と餓鬼もとっ捕まえたぞお」

館のどこかで呼ばわる声が聞こえた。

「聞けい。柴田の女房子は我が手にあり。このうえも逆らうなら、皆殺しにしてくれるぞ」
洞間声が館じゅうに響き渡る。

「刀を捨てるなら、命までは取らぬ。いや、野上の殿様に取り成してもくれようぞ」

争いの物音が、次第に静まっていった。

しばらくして。志穂姫は奥座敷へ引き据えられた。そこには、同じように肌を半ば露出した姿で緊縛されている奥方の亀乃もいた。猿轡までは噛まされていない。

「屋敷が広いだけに、手薄だと脆いもんだな」

後からはいってきた男が、勝手なことをほざく。洞間声の主だった。頭目だろう。

「餓鬼は、殿様んところへ送りつけろ」

芳若だけが連れ去られた。

亀乃が頭目をにらみつける。

「芳若を、どうなさるつもりなのですか」

亀乃様の気持ちは痛いほどわかると、すこしは冷静を取り戻している志穂姫は思った。亀乃にとつて、志穂姫は前妻の娘でしかない。芳若は、我が腹を痛めた子というだけでなく、柴田家の唯一の男児だった。芳若を失えば、柴田家の血脈が絶える懸念さえあった。もちろんそれは——四千石の柴田家が三万石の野上家に抗して存続したうえでの話ではあるが。

この男ども、おそらく野盗の集団には、野上の息が掛かっている。二千の軍勢で柴田の総勢五百を圧倒すると見せかけて待ち伏せに誘い出し、手薄になった本拠地を衝くというのが、この夜討ちの狙いだらう。とすれば——野上としては、後顧の憂いを絶つために芳若を殺すのではないだらうか。頭目の答えも、それを裏付けているように聞こえた。

「さてね。俺らにはわからんさ。いずれ、野上の殿様がお出でになる。そのときに命乞いでもしろや。餓鬼がまだ生きておればな」

亀乃が力無くうなだれた。

「昼までにや来なさると言ってたな。半日ばかり、おとなしくしている」

それから、集まっている十人ばかりの手下に向き直って。

「梅吉、庄左エ門。二人は、奥方と姫様の御守だ。わかってるだらうが、手を出すんじゃないぞ。もちろん魔羅もだ」

下卑た笑いがひとしきり湧いて、すぐ静かになる。

「あとの野郎どもは、切り取り御免だ」

歓声が破裂して。我先にと座敷から駆け出す野郎ども。

「見張りが唾つけてる女は遠慮しとけよ。それと、萩とかいう別嬪は俺のだからな」
敗残の女たちに定まっている悲劇が、幕を開けようとしていた。

「さて——と」

頭目が、亀乃と志穂姫を振り返った。

「半日もふん縛っておくのは可哀そうだな。逃げない自害しないと約束するなら、縄を解いてやるが、どうする？」

「芳若を人質に取られて、なにができませんようか」

亀乃が、意外としつかりした声で答える。

志穂姫としても、うなずくしかない。自害するのは、父と異母弟の運命を見定めてからでも遅くはない。

ふたりは縄を解かれて——しかし、ふたりの足首が鎖枷でつながれた。座って足を投げ出すか、短い襦袢の裾を気にしながら並んで立膝で座っているしかなかった。さいわいに小袖を与えられたので、男の目を気にしながら着付けて、どうにか女の恥辱は薄らいだ。さすがに廁へ行くときだけは鎖枷を外してもらえたので、薄戸一枚向こうで男が水音に聞き耳を立てているかもしれないという羞ずかしさだけで済んだ。それでも志穂姫は、尿意に迫られながらも肉体が逆らってしまう苦しさを味わったのではあるが。

芳若は野上権十郎率いる八百の軍勢に囲まれて、無事館へ連れ戻された。父であり領主

である柴田嘉門の首とともに。

二千と五百との戦いは生起しなかった。地の利を活かして待ち伏せを掛けようとする嘉門の前に、芳若を磔けた柱が高々と掲げられて——嘉門は自刃せざるを得なかったのだ。我が子可愛さではない。芳若が捕らえられたのであれば、本拠が壊滅したのは聞かずともわかる。妻子を見捨てて抗戦したところで、待ち伏せを見破られたからには勝ち味は皆無に等しい。よほどの僥倖に恵まれても、追い返すのが精いっぱい。あちらは六千の兵力から割いた二千。こちらは乾いた雑巾を絞り出しているの五百。帰るべき土地を失ったのであれば、兵の損失を補う手立ても無い。

野上は五百の命ばかりか、妻子の安堵まで許すという。従容と死に赴くより他に、嘉門の選ぶ途はなかった。

「要衝の地を我が手に収めて、これで西への進出が思いのままになったわい」

悲嘆に沈む母子を目の前にして、野上権十郎はいたわりの言葉を口の端にも掛けない。
どころか。

「とはいえ、このあたりの民草どもは四公六民などとほざいて、我になびくどころか早々と一揆の兆しまで見え隠れしておる。となると、旗印はへし折るに如くは無い」

幼いがゆえに父の仇への憎悪を隠そうともしない芳若を、じろりとらんだ。妻子を安堵するという約定など、おくびにも出さない。

「お願いでございます」

亀乃が床に額をすりつけて懇願する。

「どうか、芳若の命だけはお救いください。お聞き届けくださるなら、わらわの身は如何様にされようともかまいませんぬ」

亀乃は美貌もさることながら、まつりごと 閨上手として柴田郷に聞こえている。なにしろ、主人の嘉門が政の場で居眠りをして

「あいつめ。朝までわしの精を絞り取りおつての」などと惚気るのだから、伝え聞いた亀乃としては、赤面絶句するしかなかったのだが。今となっては、権力欲征服欲に猛けた男が食指を動かしてくれることを一縷の望みにするしかなかった。

それはもちろん。敗将の妻など、いくらでも好きに弄べる。しかし、権柄づくで腰を振らせるわけにはいかない。

亀乃にとつて、いや志穂姫にも芳若にも不幸だったのは、権十郎が女に尽くさせて喜ぶ男ではないことであつた。

「如何様に、ともな？」

「はい。死ねとおおせなら、ただちに喉を突きます。いえ、磔でも火焙りでも否やはありませんぬ」

いくらなんでも、吸茎だろうと馬乗りだろうと求めに応じますとは言えなかつた。

権十郎は女の心底を見透かしていたのか、ただ嗜虐の癖が頭をもたげたのか。

「なれば、この場で素裸になつてみよ」

「な……？！」

顔を上げて、亀乃は権十郎の顔を直視した。思いもよらない、女の身には受け容れられるはずもない言葉だつた。

しかし。亀乃は、すつくと立ちあがった。

「ご無礼いたします」

躊躇することなく帯を解いて、小袖を脱ぎ捨てた。さらに、襦袢も前をはだけて背中を滑らせる。

「母上」

芳若が、たまりかねて声を上げる。

「わたくしは、母上に恥を掻かせてまで命を惜しんだりしません。やめてください」

「黙りなさい」

亀乃が叱りつける。

「母より先に死ぬなど、親不孝の極みです。人は誰しも、素裸で生を享けるのです。なんの恥ずかしいことはありませんようか」

芳若に反駁の隙を与えず。腰巻に手を掛けると指を震わせもせず紐をほどき、最後の一枚も床に落とした。

ほおお——と、母子三人をコの字形に囲んだ家臣の口から嘆声が漏れた。

ひと呼吸、ふた呼吸。亀乃は佇立する。豊満な、しかし赤子に乳を吸わせたとは思えない張り詰めた乳房。くつきりとくびれた腰と、まだまだ子を産めそうなどっしりした臀部。

さらには、濃密だが周辺を剃り整えた淫毛までを、誇示するごとくに衆目に晒した。

それらをたつぷりと権十郎の目に見届けさせてから、あらためて土下座した。

「どうか、芳若の命だけはお救いください。伏してお願ひ申し上げます」

「さてな……」

権十郎は、冷ややかな目を志穂姫に向ける。

「おまえは、可愛い弟の命乞いをせぬのか」

権十郎としては、わざわざ可愛いと付け足して、異母弟への軋轢を引き出そうとしたのかも知れない。

しかし志穂姫には、そのような感情はなかった。ばかりか、継母への思惑もない。彼女にとって今の亀乃は、死別した当時の母の面影と重なってさえた。

志穂姫は無言で立ち上がった。継母に倣って、果断に小袖を脱ぎ捨てた。襦袢の帯は失われたままだったので、それだけで胸が露出してしまふ。上から見下ろすのと横から眺めるのでは見え方が違うにしても、小ぶりの乳房が羞ずかしかった。いや、大きければ、いつそう羞恥が募ったのではあろうが。

志穂姫は顔を朱に染めながら、襦袢の袖を抜いた。全身が薄桃色に火照っている。

腰巻の紐を指で摘まんだが——心の臓が早鐘のように拍って、手は動かない。

（芳若さえ生き延びれば……）

寺に幽閉されようと、柴田家再興の望みは潰えない。一揆の旗印、いや旧臣を束ねて立ち上がる日が必ず訪れる。

志穂姫は息を止めて紐を解き、激しい目眩を感じながら自らの手で最後の防壁を剥ぎ取った。と同時に、その場にうずくまった。

「姉上……申し訳ありません」

芳若がすすり泣く。

義母上と同じように土下座をしなければ。泥田の中でもかくように、手を前に滑らせて

上体を床に這わせた。

「ふむ。おまえも、何をされてもかまわぬ覚悟なのだな」

生娘の本能は、男の声に含まれる粘っこさに気づいていた。子を産んだ三十路越えの大年増より、十六も若い娘のほうが男の劣情を誘うに違いないとも、おぼろに理解している。しかし、弟の命を拾うには、ただひとつの返事しか許されていないのもわかつていた。

「はい。如何様になされようとも、覚悟はできております」

父を死に追いやった仇敵に操を穢される口惜しさに、声が掠れて震えている。気丈にも、涙は浮かべていなかった。

「では、今宵の夜伽を申し付ける。閨上手の亀乃に、手管のひとつも教わっておけ」

素裸で土下座平伏する二人の女に、権十郎は嘲りとも満悦ともつかぬ声を浴びせる。

「女どもは、奥座敷に戻せ。子供は縛り上げて納戸にでも押し込んでおけ」

三人そろえば、ひと思いに自害しようなどと考えぬでもないからな——と、肉親の情愛などこれっぽっちも斟酌しない男だった。

二 竿嘯

志穂姫——いや、すでに『姫』ではなく虜囚である。これからは、たんに『志穂』と記そう。

志穂と亀乃は、素裸のまま引見の場から追い立てられた。これも、旧主の権威を地に墮

とそうという深謀遠慮なのか。あるいは権十郎の悪趣味なのか。奥座敷に連れ戻されてからは着衣を返してもらえたが、志穂の襦袢は帯が無いままだった。

気恥ずかしさが先に立って、ふたりは背を向け合ったまま、いつまでもじっと座っていた。閨の手管どころか、言葉そのものを交わすこともなかった。

二人が並んで座ったのは、夕刻になって、その日の最初の食事が与えられたときだけだった。玄米の飯と鮎の焼き物、山菜のお浸しと味噌汁。ふだんよりはみずぼらしい食事だったが、虜囚の身には贅沢ともいえた。

そんなことよりも、味噌汁がいつもと同じ味だと亀乃が指摘した。志穂にはその意味がわからなかったが。

「下働きの女たちも、殺されたり連れ去られたりはせずに、この御館で働いているようですわね」

そう聞かされて、わずかに心が安らいだ。もちろん、すぐに『切り取り御免』の言葉を思い出して胸ふさがったのだけれど。

夜の帳が降りて。いよいよ夜伽の刻がちかづいたとき。いきなり亀乃が志穂の前に額ずいた。

「何事も柴田の家のためです。どうぞ、耐えてください」

「頭を上げてください。芳若は、わたしにとってもただ一人の弟です。姉として、弟を庇うのは当然です」

そう受けるしかなかったが、志穂の言葉は本心だった。

亀乃が身を起こして、さらにささやく。

「男のうちには、閨で女子に無道な振る舞いをする者もいます」

そして、微笑んで見せたのだった。

「されど、そんな男もやがては尻の下に敷くのが女子というものです。いえ、わらわは柴田を尻になぞ敷きませんでしたけれどね」

継母の意図がわからぬままに、志穂は曖昧にうなずいた。

さらに小半時が過ぎて。廊下からの声にうながされて、志穂は湯殿に向かった。わずか四千石。元より、侍女にかしずかれて身体まで洗わせるような身分ではない。三日前と変わらぬ入浴の在り方ではあった。しかし、まるきり違っていた。

仇敵に献上するために身体を清める屈辱よりも前に。

湯がひどく濁っていた。おそらく野上権十郎が使い、さらに何人もの家臣が、あるいは野党の頭目までもが浸かっていたのだろう。湯は継ぎ足したのだろうけれど、そやつらの垢が消え去ったわけではない。

志穂は湯に浸からず、生ぬるくなっている上がり湯だけで身体を拭いた。女として恥を搔かぬようにと、隠し所にも手拭いを這わせたが、荒い生地（あらいぢぢ）の肌触りに鳥肌が立つ思いだった。

垢を落として、あらためて水鏡でおのれの顔を見た。明け方の乱闘で髪が乱れて、鬢がほとんど崩れかけている。これも、やはり女の恥。思い切って髪をほだき、頭の後ろを飾り紐で括った。それはそれで、いかにも虜囚といった風情になってしまったが、いまさら結び直している暇はなかった。

「志穂殿」

湯殿の外で漏れた小さな声は継母のものだった。

「着替えを置いておきます。羞ずかしいでしょうけれど、どうか耐えてください」

逃げるように走り去る小さな足音。

言葉の意味は、着替えを手に取ってわかった。肌襦袢が一枚、それきりだった。腰巻すら見当たらない。しかも肌襦袢は薄い絹でできていた。身にまよってみると、濡れた肌へぱりついて、肌の色が透けて見えた。

(いったいに、これは……?)

亀乃が疲れた夫を励ますために闇で着用していたものとは、志穂には想像もつかなかった。もし、その事実を知っていたとしたら——かえって継母の魂胆を疑っていたこと必定ではあっただろう。

薄物一枚の身を、みずからの足で生贄の場に運ぶ。恥辱と羞恥、そしてどこで聞きかじったのか覚えていないが、新鉢を割るときに文字通りに身を裂かれる痛みへの恐怖。心の臓は喉元までせり上がり、足は雲を踏んでいるようだった。

昨日までは父の寝所だった部屋にはいり、搔卷を尻に敷いて居座っている権十郎の前に——ふだんの立膝座りも恥ずかしく、膝を揃えて正座する。

「よ、よ、よとぎに……参りました」

喉の奥から声を絞り出して、あとは目を閉じて身を固くする。

ずんつと気が動いた——ように、志穂は感じた。赤みを帯びた闇が桎梏に変じて、目の前に男が迫ったと知る。

「これはまた……敷物にもならぬものを」

この時代に布団は高貴な人々のうちのさらに一部でしか使われていない。農民などは藁の中にもぐり、裕福な者は衣服を大きくして綿を詰め込んだような搔巻を着こんで寝る。男女が交わる時などは、これが敷物となる。ちなみに、男女が衣服を重ねて並べて一夜を過ごし、朝になって互いの残り香が移った衣服きぬを着て別れるというのが、『後朝きぬぎぬの別れ』の語源である。

志穂がまどつている薄物では、その役にも立たないと権十郎は文句をつけたのである。情趣を解さない男ではあったものだ。

それでも権十郎は襦袢の帯をほどき、前をくつろげて、志穂を床に押し倒した。わざわざ灯明台を持ってきて、赤々と裸身を照らす。

「乳は小さいし、毛も疎ら。満足に子を産めそうもない尻じゃ」

昼間に裸身を見たときからわかつていたことを、わざわざ口にする。

「とはいえ。旧主の娘を見逃すわけにもいかぬでな」

好き勝手なことをほざいて。志穂におおいかぶさり、無雑作に股間を指で穿った。

「ひ……」

芋虫の化け物が隠し所に飛び込んできた。そんなふう感じた直後。股間に刻まれた割れ目をぐりつとえぐられて、鋭い痛みが腰を貫いた。

「くうう……」

誰に教わったのでもないが、農民の野合をたまたま目にするにもあれば——男女が媾合うとはどういうものであるか、漠然とした知識があった。最初は激しい痛みを伴うもの

だとも聞きかじっている。だから、志穂は抗うことなく痛みを耐えた。

志穂の忍耐を知ってか知らずか。権十郎はグリグリと割れ目をこねくった。さすがに、奥深くまでは突き挿れない。

「くうう……うう」

次第に痛みが薄れていく。なにやら、割れ目の中で指が滑っているようにも感じられた。それが男を受け挿れるための身体の準備であるとは、志穂にはわからない。

「生娘も年増も、女は女か。弄れば濡らしおるわ」

それが心からの言葉であるとすれば——この男の性的な経験の浅さを露呈している。ここでいう経験とは数の問題ではなく、男女双方のいわば琴瑟相和す愉悦の深さのことである。

権十郎には、志穂がじゅうぶんに男を受け挿れる体勢にあると思えたのだろう。襦袢を脱ぎ捨て、禪をほどく。なんだかんだと文句を言いながら、すでに怒張天を衝いている。

志穂の足首をつかんで左右に割り開き、膝を立てさせた。

(あ……)

ふだんは禁忌の奥にひそめている記憶の底から、この形が浮かび上がってきた。そうだった。こんな差ずかしい恰好の女に、男の人がのしかかってくる……

さっきのが芋虫の化け物なら、これは生温かい大根ほどにも感じられる太い物が、割れ目を押し広げた——つぎの瞬間。めりめりつと、身体をまっふたつに引き裂かれるような重たくて鋭い衝撃。

「ぎひいいいっ……痛い！ 痛い、痛い……」

とても耐えられる痛みではなかった。幼少時から仕込まれてきた女の嗜みも、武芸で練ってきた心胆も忘れて、志穂は悲鳴を噴きこぼしていた。

が、それは権十郎も同じだった。

「ぐおおおおっ！」

大きく吼えて上体をのけぞらせた。立ち上がるとうするが、腰の一点がびくとも動かない。

「こ、これは……ええい、どけい！」

片膝を立てて腰を上げようとして、すぐにうづくまる。

「痛い……どうなっておるんじや?」

志穂も同じように痛みを訴えているが、権十郎の怒声に掻き消される。

両手を突いて上体を倒し、そうするとすこしは楽になったのか、肩で大きく息をする権十郎。

「誰か……誰かおらぬか！」

襖を開けて飛び込んだのは亀乃だった。ひと呼吸遅れて、近侍の者どもが駆けつける。

権十郎は腕に頼みがあるのか、閨の痴態に含羞を覚えるのか、寝所のまわりから人を払っている。この場合は、これが幸いした。近侍の者どもが先にこの有様を目にしていたら——亀乃は追い払われるか、あるいは問答無用で志穂が殺されていたかもしれない。

「うろたえるでない。志穂姫を上にしてくだされ」

凜とした物言いに気圧されて近侍は何も訊ねず、亀乃の言葉に従った。志穂も、裸身を

あからさまにする羞恥を表に出せない。

「志穂殿、ご免」

亀乃が志穂の首筋に手刀を叩き入れた。志穂が気絶する。

「もう大丈夫でしょう。ゆるゆるとお離れください」

魔羅の激痛が消失して——権十郎は志穂を抱いたまま寝返りを打ち、それから恐る恐る身を起こす。

「女子は、ひどく驚いたり痛みがあつたりすると、ときとして天岩戸のように女淫ほとを鎖します。本人にそのつもりは無くとも、身体がそうなるのです。悪くすれば魔羅を食い千切りかねません。野上様は、よほど性急に女子を扱われましたな」

亀乃の言葉には、からかうような響きが含まれていた。

おぼろげにも事の次第をわかつて、近侍の者どもにも苦笑いに似た表情が浮かぶ。

(まったく、うちの殿様ときたら短兵急だからなあ)

そんな声が聞こえてくるようだった。まったくの艶笑話だが、権十郎にとってはそれどころではない。まだ股間を押さえて唸っている。それを見た亀乃が、大仰に叫ぶ。

「おお、これは大変。御大事所をお見せくだされ」

権十郎の前に座り込むと、その手をつかんで引き剥がす。委縮しきった魔羅の付け根がくびれて紫色になっていた。

「これはいけません。このままでは血が通わずに腐り落ちます。ともあれ、暖めねば」
言うなり、身を投げ出すようにして権十郎の股間に顔を埋めずめた。

「お、おい……?」

権十郎にとって女とは、突っ込んで罅を明ける道具であり、あるいは（縁組などによる）勢力拡大のための手段でしかない。どちらにしても、女を悦ばすとか女に奉仕させるといった発想はなかった。女に魔羅を啜えられしゃぶられるなど、生まれて初めて、驚天動地の体験であった。

そしてそれは——脳天が痺れるほどに心地よかった。天岩戸に挟まれた痛みなど、たちどころに蕩けて消えていった。

「楽になった。もうよいぞ」

しかし、亀乃は顔を上げない。ばかりか、舌先で先端を舐めたり、半ばまで引き抜いて雁首を甘噛みしたりと、技巧を尽くし始めた。

「おおお。おおおおお……」

権十郎は喜悦に喚き、それからふっと我に返った。

「おまえら。もはや大事無い。下がれ」

目を丸くしている侍臣らに向かって手を振った。

侍臣らも、この場で何が起きているかは理解して。にやついたような羨ましそうな表情で、こそこそと退出していった。

志穂は、まだ気を失ったまま。

俄然、亀乃の独擅場となった。ちゅぱちゅぱずじゅううと、音を立てて魔羅をしゃぶり、しごき——たちまちに、怒張天を衝く。

「ああ、よかった。魔羅がいきり勃つのは、血脈が甦った徴しるしです。されど……」

亀乃は身を起こして、胡座の権十郎を跨いだ。裾が大きく割れて、肉置きししお豊かな太腿ま

でが露わになる。

「このままでは、収まりがつかずすまい」

左手で権十郎の首を抱いて腰を沈めながら、右手は魔羅を握る。

「わらわにお納めください」

魔羅を女淫へ導いて、すっぽりと納めた。

「ふむ……？」

女から積極的に動くという体験も、権十郎にはなかった。興味津々といった顔つきだが、色ごとの真っ只中の割には醒めた色だった。

それは、そうかもしれない。亀乃は十五年にわたって柴田嘉門の寵愛を欲しいままにしていた。それも「朝までわしの精を絞り取りおつての」と惚気させるほどに。加えて、子も産んでいる。中はこなれ過ぎているほどにこなれている。

しかし、すっかり怒張を呑み込んだ亀乃が権十郎の上で腰をくねらせ始めると。

「な、なに……？」

きゆうつと先端を締めつけられる。肉茎に柔らかな襷が絡みつくような感触。それが、亀乃の動きに合わせて上下左右に蠢く。これも、権十郎には未知の感覚、いや肉の愉悦であった。

「くそ……柴田め。夜毎にかような思いをしておったのか」

知らず、本音を漏らした権十郎だった。

愉悦に身を任せていれば、権十郎はたちまちに埒を明けてしまっただろう。だが、亀乃がそうさせなかった。いよいよ切羽詰まってくると、腰を浮かして馬の手綱を絞るごとく

に淫囊ふぐりを握ったり。女から口を吸いにかけて関心をそちらへ逸らせたり。

手管を尽くして、延々と権十郎の愉悦を長引かせる。

いつか志穂も意識を取り戻して——二人の痴態を呆然と見物する始末だった。

その夜、志穂は危うく手討ちにされるところだった。開門して降伏すると見せかけ、城門内に誘い入れたうえで騙し討ちにしたようなものであるから、権十郎としては当然の処断である。

取り成したのは亀乃だった。

「志穂姫にもどうしようもなかったことです。生娘を練れた女同様に扱った権十郎様にも責めはございます。今ひとたびのお情けを願います。今度こそ、わらわが閨の作法など懇々と教え込みましようほどに」

権十郎は、軍門に下った将兵には寛容である。生来の性分ではなかったが、敗者を片端から根絶やしにするよりは、おのれの軍勢に加えて強大化してゆくほうが理に適っている。父から受け継いだ一万石の所領をわずか十年で三万石にまで広げたのは、そのようにして兵力を拡充させたからでもあった。いつか、敗者に肝要なのは権十郎の習い性となっていた。

志穂は赦されて、ふたたび亀乃と共に奥座敷に軟禁された。

閨での女としての嗜みと心得。さらには狎れてきてからの甘え方に至るまでを、亀乃は志穂に教え込んだ。

とはいえ志穂は——まったく不熱心で師の言葉など意にも介さぬ不出来な弟子ではあつ

たのだが。それは、二日と明けず夜に亀乃だけが権十郎に呼び出されて、上気した顔で夜更けに戻ってくるたびに、いっそうのものとなつていった。

そして、囚われの身となつて六日が過ぎた。長い六日間であつた。朝から晩まで奥座敷に軟禁され、身の回りの世話をしてくれる者もおらず弟とも会えず、亀乃とふたりきり。父を喪つた悲しさが、ようやく身に沁みる日々だつた。と同時に、すべてを奪つた野上権十郎への憎悪を募らせる日々でもあつた。

三 玉拔

その日は、不穏な平安が一瞬にして消し飛んだ。

巳の刻（午前十時前）。

奥座敷に三人の男が前触れも無しに踏み込んできた。そのうちの一人を、亀乃は見知つている。

「大庭様、いきなりのお越しとは……」

「あなた様には申し訳ないが、志穂姫ともども、柴田嘉門殿の身内として扱わせていただく。おい……」

大庭にうながされて、配下の二人ずつが志穂と亀乃にとりついた。

「けして害意はない。神妙にしてくださいませ」

大庭の言葉とは裏腹に、配下はふたりの着物を引き剥がしにかかった。

「おのれ、なにをする。やめよ！」

志穂は抗ったが、腕を取りひしがれ肩を押さえつけられて、たちまち素裸にされた。亀乃は、黙ってされるがままになっている。

志穂も亀乃も後ろ手に縛られ首縄を掛けられ、乳房を外から囲むように菱縄を打たれた。荒縄が素肌に食い込む圧迫の痛みだけではなく、毛羽がチクチク肌に突き刺さる鋭い不快感があった。

「では、外へ出ていただく」

亀乃は不安げに顔を強張らせながらも、大庭の言葉に従う。志穂は、縄尻を引かれて宙吊りにされて、致し方なく足で立った。

「か、かような姿で外へ引き出すというのですか……」

しかし。即座に自害を試みるほどの気概は、すでに失っている。

「せめて……せめて、腰まわりだけでも隠してください」

護歩は、すなわち屈服の前触れではあった。しかし、そこにつけ込むのも戦いの常道である。

「腰回りとは？」

にわかには、大庭が好色そうに頬をゆがめた。志穂は、それに気づかない。

「けて余人に見せてはならぬあたりだけでも……」

「それは、このことかな？」

大庭が素早く動いて、志穂の淫裂に掌を当てた。

「あれえ……は、はい。せめて、ここだけでも隠してください」

悲鳴を抑えて、志穂は彼女なりに気丈に懇願する。

「ふむ。亀乃殿は如何か。股座を晒すのは羞ずかしいかな」

亀乃は大庭の目の奥を覗き込んで、それから志穂に目を転じて。かぶりを振った。

「野上様の後下知なれば、何事につけ従います」

「では、亀乃殿には股座を晒したままでいてもらおう。志穂姫には……」

大庭は自らの手で、荒縄を二重にして志穂の腰に巻き付けた。

大庭の意図がわからず、志穂は身を固くしている。前で結ばれた荒縄が、二本を芯にして二本が交互に巻きつけられてゆき、太い束になった。

「きゃあつ……」

後ろから太腿の間に手を突っ込まれて悲鳴をあげたときには、縄束が前から後ろへ股間を割っていた。縄束がグイと引き上げられて、淫裂に食い込む。

「ひいひい……」

うずくまろうとして、みずから縄束をいつそう食い込ませてしまう。

「なにをなされます。か、かような……きひいひい」

ぐいぐいと後ろで縄を引き上げられ、志穂は爪先立ちになりながら大庭を詰る。

「股座を隠したいと申すから、そのようにしてやったまでじゃ」

それが志穂を辱める口実なのは——縄束をひねって、巻きつけられた縄が交差する側を股間にあてがった手間ひとつを見ても明らかだった。

「これでも足りぬのなら」

腰縄に四本をくぐらせ絡め合わせてから、後ろから前へと通そうとする。

志穂は渾身の力で腿を閉じようとしたが——それは、股間に食い込む縄束を淫唇で締めつける結果となる。毛羽が柔肉に突き刺さる鋭い痛みを生じさせた。思わず、腿が緩む。

「あうう……」

すかさず縄が股間を突き通して、二本ずつに分かれて鼠蹊部に沿って引き上げられた。それを最初の縦縄に結びつけられる。

「それでも、まだ肉褻が覗いておるな。されば、いまひとたび……」

すっかり短くなつた縄尻を、大野はさらに前から後ろへ引き回そうとする。

「ゆ、赦してください。ほどこいでください」

「なにを申すッ」

懇願を大庭が一喝した。

「隠せだ解けど、我儘もたいがいにせい。おまえは虜囚なのだぞ。おとなしく我らに引き回されておれ」

「……………」

志穂は言葉を飲んだ。なにを訴えても、さらに辱しめられるだけと悟つた。濃密な茂みを晒して恬然としている（と、志穂には見えた）亀乃に、恨みがましい目を向けた。

「つまらぬことで手間取つた。きりきりと歩んでもらおう」

大庭の配下に縄尻を引かれ、やむなく志穂は歩を前へ運ぼうとして。股間を鋭い痛みに襲われて腰を引いた。

「くううう……」

腰を引いても痛みは、その位置をわずかに変えただけで、一向に軽くなるらない。

「歩けと言うに」

ピシリと尻を叩かれ反射的に前へ逃げて、さらに激痛が食い込んでくる。振り返ると大庭が、細竹に藤を巻いて漆で固めた指揮杖を振りかざしていた。

「おまえは牝馬か。尻を叩かれぬと歩かぬのか」

ピシイッ。さらに強く志穂の尻を打ち据える。

「歩きます。歩けばよいのでしよう」

志穂は気丈に言い返して、股間の鋭く焼けるような痛みをこらえて歩きだした。衆人環視の下で打ち据えられるなど、素裸を晒す以上の屈辱だった。

股間のチリチリする激痛をすこしでもやわらげようとして、傍目には滑稽なへつぱり腰で廊下を歩いて――館から引き出された。

玄関の先は表庭。というよりも、大門に至る広い空き地である。そこに五十を超える子どもが集まっているのを見て、志穂は館へ逃げ込もうとした。遮られて、庭へ突き出される。

志穂は伏せた顔を上げられない。集められた者どもを、大半は見知っている。領地内の村々の長や顔役だった。

どよめきが地鳴りのように沸き起こる。しかし。殿様の奥方と姫君が素裸で縛られて晒し者にされるのを目の当たりにしたわりには、驚愕の響きは薄かった。

それもそのはず。人々は、いっそう凄惨な光景をすで見せつけられているのだった。

玄関口のすぐ先に太い丸太が二本、斜め十文字に組まれて立てられ、そこに若君が大の字に磔けられている。芳若も素裸だった。手足だけでなく、腕も腿も胸も腰も丸太に縛りつ

けられて、わずかな身じろぎすら封じられている。

このような形で嗣子を磔けるからには——処刑が行なわれるとしか考えられない。

「約束が違うではありませんか?」

磔柱の横に据えられた床几に陣取っている野上権十郎に向かって、亀乃が悲痛な叫びをあげた。

「命は取らぬと、そう約束してくださったはずです。ならばこそ、志穂殿に代わってわらが……」

夜毎に命乞いをしてきた——とまでは、さすがに口に出せなかったのだが。

「約定は違えぬ」

亀乃と志穂は、芳若の左右に三間ほど離れた位置に引き据えられた。

「とはいえ。寺に放り込もうと、いずれは我に叛旗を翻すやもしれぬ。なれば、根絶やしにするしかあるまい」

芳若の命は助けるが一族皆殺しにする。まるきりの矛盾に聞こえたのだが。

「そのの娘に食ひ千切られかけて、ふと思ひ立ったのだ。これは、我が城から呼び寄せた唐人の医師じゃ」

僧形をしているが、きつく眦の吊り上がった男が、両腕を前で組んで権十郎に向かって頭を下げた。

「唐土もろこしでは宦官とかいう者がおるらしい。男の器官を切除して、女ばかりの奥向きに仕える者だそう。子を種付けできなくすれば、妙な野心を起こすこともあるまい」

「おお……」

亀乃の身体が大きく揺れて、そのまま地に倒れ込みかける——のを、縄尻を握っていた男が抱きとめた。

志穂は——心も身体もその場に凍りついている。このような残酷を思いついたのが自分のせいだと言われて、喉から腸はらわたまで鉛の棒を突き刺される思いだった。

「しかし、それはそれで面白い」

権十郎が亀乃に残忍な嗤いを向けた。

「玉も竿も切り落とすと、むしろ煩惱が減るのではないか。もちっと苦しめてやらねば、魔羅の虫が治まらぬわ」

魔羅と腹を掛け言葉にして、これは志穂への当てこすりだろう。

「宦官の中には、玉を抜いた袋を縫い合わせて、見た目を取り繕っている者もいるそうなの。つまり……いや、我も見たことがないものを、あれこれ言い聞かせるも難しい。百聞は一見に如かずじゃ。可愛い我が子、そっちの娘には腹違いの弟じゃな。そやつがどうなるか、とくとおのが目で見届けるがよい」

素裸で大の字に磔けられている芳若は健気にも、柴田家の惣領として見苦しい真似はすまいと、唇を引き結んで宙を睨み据えている。

その前に、唐土もろこしの医師という男が立った。薬師箱から香炉を取り出して、盛大に薬草を燻し始めた。下人を呼び寄せて芳若の口を押さえさせ、鼻先に香炉を近づけた。

息を止めるような無駄なあがきはせず、芳若はおとなしく煙を吸い込んだ。激しくむせて、それでも香炉を突きつけられているかぎりは素直に煙を吸い込む。

やがて——芳若の瞳から生気が失せて、全身が弛緩する。荒縄がよじり合わされて、芳

若の口を割り縛った。医師が細い小刀を取り出して、芳若の足元にひざまずいた。下人が、芳若の腰を両手でがっちり握り据える。

医師が淫囊の付け根をつかんで、下から縦に切り裂いた。

「ぎゃああああああっ……!!」

声変わりする前の少年の甲高い絶叫が、荒縄の猿轡を突き破って広場に轟き渡った。

「ばはあ……ばはあ……」

絶叫の後は、瀕死の荒い息。

切り裂かれた淫囊から、小さな白い玉が肉の筋に吊られて垂れ下がる。その筋を断ち切って、医師は辜丸を素焼きの皿に乗せた。それは厨くりやに運ばれて——今夜にでも権十郎の食膳に乗るだろう。獣の辜丸は、精のつく食べ物として珍重されている。同じ人間のそれなら、効き目は如何ばかりであろうか。

それは、医師には関係のない話である。彼は淡々と、もう片方の処置に取り掛かる。

二度目の絶叫が亀乃と志穂の耳にも届く。芳若が気絶するよりも早く、志穂も気を失って、縄尻を持つ男の腕の中に倒れ込んだ。

しかし亀乃は、最初の衝撃から立ち直った後は、目をかッと見開いて、我が子への残虐を見届けようとしている。

男としての機能を奪われて、しかし芳若への辱めはまだ終わっていない。

医師は切り裂いた淫囊を焼酎で洗った。ついに精を放たずに終わった淫茎を股間に押しつけて後ろへ押し込み、淫囊で包んだ。左右の淫囊が合わさる部分に小刀で浅い傷を創り、それをくつつけて、太い糸で縫合していく。上から下まですべてを縫ったのではない。小

便を排出できるように、下端の一寸ほどは開いたままにしてあった。

芳若の股間は、幼女のそれのような一本筋に閉ざされた。やがて傷口が癒着して縫い合
わせた糸が抜かれれば、まさしく未性熟の女性器のような外観になるだろう。

芳若には、女犯を固く禁じられた寺に幽閉されて、生臭坊主どもに弄ばれる運命が待っ
ている。肌が滑らかなになる納豆やきな粉、食しすぎると男でも胸が膨らむといわれる柘榴
などを大量に与えられて——女っぽい身体つきに作り替えられていくのだが、それは別の
物語となる。